

ベルリオーズ：幻想交響曲 Op.14

エクトル・ベルリオーズ（1803-1869）が「幻想交響曲」を初演したのは1830年、彼がパリ音楽院に通い、優秀な若手に贈られるローマ大賞を受賞した年であった。ベルリオーズはこの数年前からパリで開かれていたベートーヴェンの交響曲連続演奏会に刺激を受け、自らも交響曲の大作に挑んだのである。それは新しい発想と、型破りな形式による交響曲だった。

「ある芸術家の生涯によるエピソード」という副題をもつこの交響曲は、ベルリオーズの自伝的な内容を発想の源とする標題音楽である。ストーリーは、病的な感受性と燃えるような想像力を持つ若い芸術家が、失恋してアヘンで服毒自殺をはかるが、致死量には至らず、奇怪な幻想を見る。そのなかで、恋人がひとつの旋律となってつきまとう、といった内容である。ベルリオーズはこの恋人の旋律を「イデー・フィクス（固定楽想）」と呼び、全5楽章を結びつける役割を与えた。「恋人」のモデルになったのは、当時彼が憧れていた劇団女優、ハリエット・スミソンである。ベルリオーズは熱烈なファンだったが、思いは伝わらなかった（二人は初演後に結婚した）。ベルリオーズが上記のような物語を考えたのは、ゲーテの『ファウスト』の影響が強かったようである。オーケストラ曲に物語、つまり文学を結びつけた「幻想交響曲」は、交響詩などの標題音楽への道を切り開いた。

ユニークなのは、標題ばかりではない。楽章が5楽章もあることに加え、情景や心理を巧みに描写するオーケストレーションにも、時代を先取りする新しさがあった。

初演は1830年12月5日、パリ音楽院ホールにて、フランソワ・アブネックの指揮で行われた。

第1楽章「夢と情熱」：ソナタ形式。序奏のあと、アレグロの主部で恋人の旋律が現れ、この主題を中心に展開されていく。

第2楽章「舞踏会」：優雅なワルツ。複数のハーブが活躍する。最後の方に恋人の主題がクラリネットに現れる。

第3楽章「野の風景」：冒頭で羊飼いの笛、すなわちステージ上のイングリッシュ・ホルンと舞台裏のオーボエが呼びかわす。途中で恋人の主題が現れ、最後は2組のティンパニが遠雷を描写する。

第4楽章「断頭台への行進」：若い芸術家は恋人を殺した罪で断頭台（ギロチン）へと向かう。行進の最後に恋人の主題がクラリネットに現れた後、全合奏でギロチンの刃が落とされる。

第5楽章「ワルプルギスの夜の夢」魔女たちの夜宴。Es 管クラリネットが、醜く豹変した恋人の旋律をユーモラスに吹く。続いて鐘が鳴り、オフィクレイド（今日ではチューバ）が「怒りの日」の旋律を厳かに奏する。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート2（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持ち替え1）、クラリネット2、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、

トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、バスドラム、スネアドラム、鐘2、ハーブ4、弦五部

※スコア上の表記